

OITA サイクルフェス 2018 学連選抜チーム活動報告書

明治大学体育会自転車部コーチ
西沢倭義

大会日程

10月12日（金）受付・監督会議・レセプションパーティー レンブラントホテル大分
10月13日（土）おおいたいこいの道クリテリウム 1km×30周 大分いこいの道周辺
10月14日（日）おおいたアーバンクラシック 10km×15周 大分スポーツ公園周辺

スタッフ

高宮正嗣（第一監督）
西沢倭義（第二監督）
岡野春香（マッサー）
脇野栄治（メカニック）

選手

冨尾大地（鹿屋体育大学）4年
竹村拓（明治大学）3年
石井駿平（鹿屋体育大学）3年
重満丈（鹿屋体育大学）2年
西原裕太郎（鹿屋体育大学）1年

結果

・10月13日（土）おおいたいこいの道クリテリウム

1位：黒枝咲哉 シマノレーシング
25位：重満丈
DNF：冨尾大地、竹村拓、石井駿平、西原裕太郎

・10月14日（日）おおいたアーバンクラシック

1位：石上優大 日本ナショナルチーム
27位：重満丈・38位：冨尾大地
DNF：竹村拓、石井駿平、西原裕太郎

大会サイト：<https://www.oita-cyclefes.com/>

活動報告

初開催となった大分での UCI レースに学生選抜チームとして参加した今大会は、学生たちと同年代選手の活躍が目立つレースとなり、まさに世代交代を予感させるような印象を受けた大会となった。結果的には苦杯をなめた大会ではあったが、普段の学連レースとは違うレース展開に大いに刺激を受けたことは間違いないのではないだろうか。

12日（金）のレセプションパーティーでは、華やかな雰囲気味わうと共に、MC から学連選抜チームの紹介を受け、翌日からのレースへ向けての意気込みを語った。

13日（土）天気は晴れ。気温もそこまで高くなく初秋らしいレースにはいいコンディション状況であった。朝食を各自ホテルで済ませたのち自走にて会場入りし、壇上にて MC からの紹介を受けてサインボードへ出走サインを行った。パレード走行を終えたのち 12 時 5 分に、いこいの道クリテリウムのスタートが切られた。距離も 30 キロと短く、スタートからハイペースな展開となり集団の後方に位置する選手はどんどんとレースを下されていく。単発での動きはあるもののシマノレーシングの積極的なコントロールで逃げはなかなか決まらない。海外勢にも力のあるチームは、オーストラリアサイクリングアカデミー（ACA）のみで、その他の海外チームに有力な動きはなかった。レース中盤には学生選抜チームも集団に重満選手を残すのみとなり 4 名は DNF となった。ラスト 2 周からは ACA の 2 名が先頭に立ち最終 5 名のスプリントでシマノレーシング黒枝選手の優勝が確定した。94 名でスタートしたレースは 51 名が完走という結果であった。

スタートから後方で、1 度もその位置から動くことが出来なかった学生選手たちは経験不足とは言え、スタートラインに立つ前の気持ちにも問題がある気がした。彼らのような学生トップレベルの選手であればどの位置で走らなければならないかイメージできたのではないだろうか。レース展開は最初からある程度予想がつくものであったため、今回であれば、重満選手以外はほぼレースを走っていないに等しいと言える。非常に悔やまれる結果となった。

続く 14 日（日）のおおいたアーバンクラシック。こちらも快晴の中レースが行われた。大分銀行ドーム周辺を 15 周回する 1 周 10km のアップダウンコース。一見上りが中心のレースかと思われるが、スタートゴール前の上り以外は集団も長く伸び、こちらも後方に位置すると足を消耗するばかりのコースレイアウトである。

前日からの反省を踏まえスタートするが、逃げに選手を送り込みたい各チームからの散発的なアタックとハイペースなレース展開に、補給が開始される 50km 地点では既に集団に富尾選手と重満選手を残すのみとなった。この時点で、竹村選手・石井選手・西原選手は DNF となる。補給が開始されるころには、10 名程度の逃げができており、終盤まで逃げ続ける形となった。富尾・重満選手も補給をうまくとりながら集団中程から後ろの位置を前後しながら、動くことこそ出来なかったが、厳しい展開の中で最後まで粘る走りを見せてくれた。最後は、3 名の展開となり、後続から追いついた松田選手と終始レースメイクし続けた石上選手（共に JAPAN ナショナル）が雨澤選手を振り切ってワンツーフイニッシュを飾った。

学連レースのみでなくこういった UCI レースに参加できたことは、普段学連レースのトップを走る彼らに現状の力では大きく課題が残ることを再認識させてくれたのではないだろうか。同時に、学連選手たちの力はまだまだ底上げが必要であり、今回参加した彼らとその一手を担ってくれることに期待したい。

以上



